

## 感謝と今思考していること

1993～1996 年度世話人

小笠原 紀代子 (元筑波大学附属聴覚特別支援学校)

「ハーモニー」とのかかわりや思いは以前に述べました (ハーモニー第 50 号) が、「ハーモニー」に携わっていた当時、研究会日程決定の際に、養成側の方々のご都合より私どもの学校行事等が重ならないようにと、堀内久美子先生がいつも配慮してくださいました。共同研究班当時も同様でした。有り難いご配慮で、そのお陰で研究意欲を持続させていただきました。今改めてお礼を申し上げます。

図らずも非常勤ながら養成側に立つ身になって、「学生に何を伝えるか」が常に脳裏にあります。倫理綱領に繋がる養護教諭としての確固たる信念、その確固たる信念を具現するに足る養護教諭の職務を遂行するための基礎技術・知識・言動・身仕度、そして、アセスメント...フィジカルアセスメントやヘルスアセスメントという表現だけではおさまりきれないアセスメント...。このようなことが常に私の脳裏を駆けめぐっています。多分に自身の養護教諭時代の経験に基づいていると思いますが。

アセスメントに関しては、例えば次のような思考が駆けめぐっています。「子どもたちの日常の服装や髪を含めた全身の状況や言動面、学習環境、生活習慣等を統計や目・耳・感覚でアセスメントをし、養護教諭自身の心身に焼き付けていることによって子どもたちの“異常”の早期発見に繋がる。」

その他、次のようなことのアセスメントも養護教諭として為すべきことの気付きに繋がるとの思考があります。「勤務校の校風」「担任の置かれている状況」「基礎疾患のある子どもへの支援体制」等々です。

## 「研究会」から「学会」までの関わりと養護教諭教育への願い

1993～1996 年度世話人

曾根 睦子 (元筑波大学附属駒場中・高等学校)

1992 年の「全国養護教諭教育研究会」発足から 20 年、その間に「日本養護教諭教育学会」となり、20 回の学術集会開催、そして発行された「ハーモニー」も第 60 号を迎えようとしています。

私は、養護教諭の養成機関から現場経験の必要性を痛感して附属校の養護教諭に転職後、全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会の会長として、附属校の養護教諭が携わる養護教諭教育 (養成、実習指導等) および研究活動の推進に取り組んでおりました。また、養護教諭の全国組織として「全国養護教諭連絡協議会」設立とその運営・発展に努めておりました。そこで、養成と現場を繋ぐ役割を果たせる立場にあると考え、研究会設立に参加し、設立の趣旨・会の目的に賛同し、準備会世話人の 3 名の養成機関の先生方に加え、現職養護教諭として小笠原先生と共に発足時から世話人を務め、会運営・研究活動で多くを学ばせていただきました。そして「学会」設立までの準備 (会則案等) に携わり、世話人を退任いたしました。現在は、再び養護教諭の養成に携わるとともに、全国退職養護教諭会 (旧全国みどり会) の事務局を引き受けております。それぞれの活動の経験を通して、一貫して言えることは、「目指すは養護教諭の資質向上と力量形成である」ということでした。正直に言って、現在は養護教諭の養成機関が急増して、複数の資格に加え養護教諭免許も容易に取得できる大学もあり、養護教諭の「質」を懸念しております。今こそ、高度の養護教諭教育が必要と強く感じています。

## 日本養護教諭教育学会設立時を振り返って

1993～1996 年度世話人、1997～1999 年度理事

中桐 佐智子（藍野大学医療保健学部）

日本養護教諭教育学会が 20 周年を迎え、感無量の思いがこみ上げてきました。

私に関わった日本養護教諭教育学会の立ち上げに至る過程が、思い浮かびました。私が養護教諭の教育に関わり始めた頃は、養護教諭関係の集会はありませんでした。日本学校保健学会に参加し、会場で隣り合わせた女性に声をかけ、養護教諭の輪を広げていきました。学会に参加した時には、会場の片隅で仲間と久しぶりに顔をあわせて、仕事のことや悩みなどを話していました。そのうち学校保健学会の会員に養護教諭も少しずつ増加し存在感を増していきました。1982 年に「養護教諭養成教育のありかたをめぐる」という要望課題が設定されました。茨城大学の小倉学教授を中心に養護教諭及び養成教育関係者による共同研究班が組織され、養護教諭養成教育を見直し、望ましい養護教諭養成教育を求めて、3 年間の研究を続けました。その後この研究会は名称を変えながら数年続き、その成果を日本学校保健学会に発表したり、「これからの養護教諭の教育」にまとめ、東山書房から出版しました。

ところが、研究の世話人の 1 人であった泉谷秀子先生（愛知女子短期大学）が授業中に教室で突然死亡するという事態が発生し、私たち研究員は、そのお葬式に集まり泉谷先生のことを偲び、養護教諭の教育の悩みを話しているうちに、このまま解散するのではなく研究会を続けて行こうという話がまとまりました。

このときの研究員を中心に、1993 年に堀内久美子先生（愛知教育大学）を会長に全国養護教諭研究会を立ち上げ、毎年総会と研究発表を行い、研究会誌を発行しました。最初は会員も少なく、学校保健学会の翌日に研究会を開催していましたが、次第に会員も増加し、4 年後に日本養護教諭教育学会と改称し、養護教諭に関わる教育、実践活動、教育行政をテーマに、学術集会を開催することになりました。

あれから 20 年の歳月が流れ、2012 年 10 月に名古屋市で第 20 回学術集会が盛大に開催されました。その会場で、学会を設立した初年度の会員 46 名のうち、現在も会員である 26 名が、三木とみ子理事長から感謝状をいただきました。改めて、養護教諭の教育目標の明確化や教育内容やカリキュラムを、夜を徹して話し合った若き頃の思いが心によみがえりました。

20 年間に多くの研究がなされて充実してきていますが、養護学の体系化と養成教育のカリキュラムの改革が課題として残っています。中教審の答申が出され、日本の教員養成体制が大幅に改革されようとしているこの期に、懸案の改革がなされますことを期待しています。



## 第1回大会の思い出

1995～1996 年度世話人

中川 優子（藤沢市立藤ヶ岡中学校）

日本養護教諭教育学会の創立 20 周年、おめでとうございます。

研究会時代に世話人として仕事をさせていただいたことが、その後も私の養護教諭としての職務に反映されているように思います。私は当時、横浜国立大学教育学部附属横浜中学校に勤務していました。本会に入会したのは、小笠原紀代子先生（当時は筑波大学附属聾学校に勤務）に誘っていただいたからです。入会した翌年に、「日本学校保健学会が横浜市を会場にして開催されるので、その翌日（土曜日）に本会の第1回大会を横浜市内で行いたい。」という相談があり、私の勤務校を使用したかったのですが、土曜日も授業や部活動がありお受けできず、隣接している附属養護学校の副校長先生に相談したところ、「子どもたちは授業をしているけれど、集会室でよければ使用してください。」と快く会場を貸してくださいました。第1回大会は大会冊子も案内版も会場内の看板も…全て手作業で用意しました。昼食は横浜名物『崎陽軒のシウマイ弁当』にしました。総会のあとに参加者全員で歌を歌い閉会したのを記憶しています。その翌年ぐらいに世話人をされていた曾根睦子先生（当時は筑波大学附属駒場中・高等学校に勤務）に声をかけていただき、役不足とは思いましたが、本会の世話人をさせていただくことになりました。当時の私は養護教諭としての経験も浅く、世話人として十分な仕事はできなかったと思いますが、本会の先生方から多くのことを学ばせていただいたことを心より感謝しています。

## 全国養護教諭教育研究会の世話人となって

1995～1996 年度世話人

小林 壽子（元鈴鹿短期大学）

私が全国養護教諭教育研究会の会員となったのは、1993年（平成5年）10月である。この1ヶ月後に第1回学術集会在11月27日横浜市にて堀内久美子先生を実行委員長とし、記念すべき開催となった。確か小雨の中を舗装されていない細い道を足元を気にしながら会場へ向かったように思う。同じ時期に第40回日本学校保健学会が近くの大学で詫間晋平先生を学会長として開催されており、こちらにも参加した。副学会長が大学の学友のご主人であったことで、ご挨拶も出来た。翌年の第2回は大阪市であり、石原昌江先生が実行委員長となられ私も参加した。研究発表やフロアからの質問、意見も活発に行われ、私も頑張って手をあげた。研究への意欲が湧きいでいた。翌年の1995年4月思いがけない声がかかった。世話人の依頼である。所属短大では丁度改革期で多忙を極めていたが受諾した。その代表は堀内久美子先生で大谷尚子、盛昭子、中桐佐智子、小笠原紀代子、片山良子、曾根睦子、中川優子（敬称略）と私の9名で任期は2年であった。会議は筑波大学附属駒場高校の曾根先生の保健室で毎回行われた。早朝からの会議では、近くのホテル泊となり、また嬉しい時間でもあったが学会誌発刊への研究会議でもあったため、次回までに課題の調査分析物を持参することとなっていた。学会誌創刊号に2年間の研究結果が第1報～第3報として掲載された。更に世話人は順番にハーモニーの印刷をすることである。業者依頼が間に合わず、学内の印刷機で夜間遅くまで行った。頑張れたのは当時助手だった大西真由実先生のおかげである。

## 養護教諭教育における研究と実践

### —黎明期を振り返る—

1997～2002 年度理事

石原 昌江 (元岡山大学教育学部)

上記の主題は2009年に弘前大学で開催された本学会第17回学術集会(面沢和子学会長)におけるミニシンポジウムⅠ『思いを語る—養護教諭養成のこれまでとこれから』で、筆者が担当した報告書より引用したものである。その中で1972年、同大学で開催された第19回日本学校保健学会において養護教諭関係者による最初のシンポジウム『養護教諭の職務の今日的課題』が契機となり、養護教諭教育に関する研究協議が計画的・継続的に実施されるようになったこと、また、その成果は学会の要望課題『養護教諭の養成教育のあり方をめぐって』として発表(1982～1984年)、同時に「養護教諭の養成教育のあり方」共同研究班(世話人:小倉学氏)を設立し、随時、学会・学会誌等に発表(1986～1989年)、1990年には『これからの養護教諭の教育』の出版に至る経緯について報告した。これらを受けて、1992年に名古屋市で開催された第39回日本学校保健学会(安藤志ま学会長)時に、養護教諭教育(養護教諭の資質向上と力量形成)の発展を願って、本学会の前身である全国養護教諭教育研究会の輝かしい誕生をみたのである。関係者にとって、本学会の設立は、まさに悲願の達成であり、新しい時代の始まりであった。翌年には第1回研究大会(実行委員長:堀内久美子氏)を横浜市において開催、1994年には第2回研究大会を大阪八尾市で開催、筆者が実行委員長を務めた。また、新たに養護教諭教育に関する共同研究班を設立し、本学会独自の研究体制作りにも寄与した。

### ハーモニー編集委員として

1997～2002 年度理事

楠本 久美子 (四天王寺大学)

養護教諭教育学会設立20周年を迎えられ、おめでとうございます。

私は、2004年から4年間ハーモニーの編集委員を務めました。ハーモニー編集委員の立場からハーモニーの編集を振り返ってみたいと思います。

ハーモニーの役割は、全国の養護教諭養成機関及び現職養護教諭、関連機関による養護教諭の現況と将来を見通した機能や役割にふさわしい資質と力量の向上を目指し、単なる情報誌ではなく、研究と実践との連携、研鑽の機会の提供が目的であり、全国の会員のそれぞれの思いを養護教諭教育学会の下に結集できる学会誌でありたいと願いました。

ハーモニーの掲載記事には品格と新しさを求め、会員の活動に新鮮な刺激を与えられる内容であることを基本とし、投稿の募集をしては、たえず堀内久美子先生から助言をいただいていたことが昨日のように思い出されます。

これからもハーモニーが格調高い学会の顔であり続けることを祈念いたします。

## 世話人・理事・事務局長として関わった12年間

1997～2002年度・2009～2014年度理事

下村 淳子（愛知学院大学心身科学部）

学会設立20周年を迎えましたこと誠にありがとうございます。この記念すべき年を理事として迎えることができ、大変光栄に思っています。思えば1997年4月、堀内久美子理事長の第I期理事会が私の理事(当時は世話人)としてのスタートでした。たった1人、現職養護教諭の立場で理事会に出席し、何もわからず戸惑うことばかりでした。それでも、まずは学会運営を軌道にのせるために、わからないなりに夢中で頑張ってきました。当時は会員が300名にも満たない小さな学会のため、事務局員を雇う余裕はなく、私が事務局の庶務的な活動、ことに会員登録やハーモニー等の発送作業をしました。会員名簿の入力作業や会費のチェック、発送作業等を行う中で、年々会員が増え、学術集会が充実するなど、学会が大きく発展していく様子を間近で感じることができました。得難い貴重な経験でした。その後、大谷尚子理事長の第II期、後藤ひとみ理事長の第IV・第V理事会で事務局長・理事として学会運営に携わり、今年で13年目を迎えます。一緒に世話人・理事をしてきた諸先輩方から多くの教をいただき、学会運営のみならず、研究への示唆や刺激もいただきました。これらの学びを、今度は次の世代に伝えていくことが私に課せられた役割と考えます。本学会がますます発展し、養護教諭にとって有益な学会となるためにも第VI期では三木理事長を支えながら、学会を受け継いでいってもらう後輩達を育てていくことが私の新たな使命と思っています。今後ともよろしくお祈りします。

## 本学会に関する思い出と今後への期待

1997～2002年度理事

盛 昭子（元弘前大学）

本学会が設立20周年を迎え感慨無量である。その設立のきっかけは日本学校保健学会の要望課題「養護教諭の養成教育のあり方をめぐって」であった。1年次の演者の1人として筆者は「現職養護教諭と養成機関側との共同研究の必要性」を述べた。その願いが学会共同研究で実現し、更に、それを契機に本学会の前身である全国養護教諭教育研究会が発足した時の喜びを忘れることができない。

全国養護教諭教育研究会第4回研究大会の思い出：テーマ「今求められている養護教諭の力量とは一時代の養成に応え得る養護教諭の育成のために」のパネルディスカッションでは養護教諭、行政、養成教育のそれぞれの立場からの提言後、活発な意見交換がなされた。中でも力量を実践の中で主体的に探究する発言や、討論が養護教諭の研究能力の育成に発展したこと等が懐かしく思い出される。

学会誌第3巻～第5巻発行の思い出：各巻の特集は養護教諭の実践と研究能力に焦点化された。その各巻に寄せられた論文から、養護教諭の「研究的実践」と「実践的研究」といった「相互主体的」、「方向探索型」の研究の重要性や、そのような研究を通して深まった子ども観、教育観、養護観等々が実践の問い直しの視点として重要であることを学び得たことが思い出深い。

このような思い出から、会員の個人研究並びに共同研究によって養護活動や養成教育の根拠となる理論が一層明確になり、自他共に許す養護学の確立とその発展に寄与することを本学会に期待したい。

## 学会設立 20 周年に寄せて

2000～2005 年度理事

村瀬 久美 (愛知県立加茂丘高等学校)

日本養護教諭教育学会設立 20 周年、おめでとうございます。

私は、2000 年度から 6 年間理事をさせていただきました。その間「ハーモニー」の編集や会計を担当しましたが、ワーキンググループで「養護教諭の英訳および本学会の英文名」に取り組んだことが、特に印象に残っています。英訳と言ってしまうとそれまでですが、もともと欧米にはない概念をゼロからつくるわけですから、養護教諭という存在そのものを見つめ直す機会となりました。

私が今日、主任養護教諭としてまがりなりにも職務を遂行できるのは、数多くの方々のご支援と、豊かな経験から生まれる幅広い知見や最新の情報に触れることができるおかげだと思っています。私は、それらの多くを本学会を通じて手に入れることができました。

これまで、本学会が果たしてきた役割は非常に大きなものがあります。養護教諭の教育・育成はもちろんのこと、その職務についての深い洞察に基づく数々の研究と啓発活動、さらには今日的課題への取組等々、全国の養護教諭とその育成に関わる人々に対し、与えた影響は計り知れないと思います。近年、養護教諭の重要性が深く認識され、期待も年々高まっています。ひとりでも多くの方が本学会と出会い、その期待に応えるべくさらに研究と実践を重ねていかれることを切に希望します。また、私も会員のひとりとして、加わっていきたいと思います。

## 20 年をふり返って

2003～2005 年度理事

植田 誠治 (聖心女子大学)

日本養護教諭教育学会設立 20 周年、誠にありがとうございます。2003 年度から 3 年間にわたり、天野敦子理事長のもと理事を務めさせていただきました。また、第 10 回学術集会でのシンポジウム、学会の英語表記に関する検討ならびに養護教諭の専門領域の用語検討など、会員の先生方との深く熱い議論と作業により、いろいろなことを学ばせていただきました。

前後しますが、横浜で開かれた第 1 回学術集会も印象に残っています。たしか堀内久美子先生のリードによりみんなで歌を歌ったように思います。驚きとともに何かあたたかい独特の雰囲気を感じました。当時私はまだ若く(笑)、勤めていた金沢大学養護教諭特別別科の授業を、いわば自転車操業で行っていました。別科の「養護教諭の職務(当時)」を担当いただいていた非常勤講師山本サヨ先生とともにこの学術集会に出席し、あらためて養護教諭を養成する教育のあり方について、考え整理する必要性を実感したことをおぼえています。しばらくしてから茨城大学教育学部へ異動、そして現在養護教諭教育との関わりは、非常勤講師としての養成といくつかの現職研修でとなりましたが、冒頭に述べた議論と作業で得たことの多くを活かすことができているように思います。

養護教諭のプロフェッションを高めていくために、今後、本学会の果たす役割や意義はますます高まると思います。日本養護教諭教育学会のますますの発展を祈念してやみません。

## 光陰矢の如し

2003～2008 年度理事

竹田 由美子 (元神奈川県立保健福祉大学)

名古屋で開催された日本学校保健学会の一教室で堀内久美子先生や天野敦子先生、大谷尚子先生たちが、「養護教諭のための研究会を立ち上げるので入って」と勧誘されていた姿や当初は養護教諭教育研究会として設立されたことを記憶していますが、もう成人式を迎えられたのですね。光陰矢の如しと言いますが、月日の経つのは早いものですね。

理事として学会運営に携わっているとの理由からか、巡り巡って第9回の学術集会を神奈川で開催してくれないかと打診されました。紆余曲折の結果、お引き受けしました。お引き受けしてからは会場を何処にするか悩みましたが、当時の神奈川県立衛生短期大学の事務局や県当局のお骨折りもあって、湊南国際村のホテルを貸し切り、皆様を缶詰状態にして学術集会を開催したことを思い出します。現在のような大人数の参加者ではとても出来ないことでしたが…。

学会を現在までにする道のりは決して平坦ではなく、どうしたら会員が増えるだろうか、養護教諭の先生方はどんなことを求めているのだろうかといったことを追求した結果が現在の学会の姿になっているのではないのでしょうか？そこには歴代理事長さんのすばらしいアイデアや推進力が大きかったと思います。

ここに学会の発展に寄与された歴代の理事長や理事の方々に敬意を表するとともに、これからのますますの発展を願っています。

## 学会の発展と組織基盤の盤石化

2003～2011 年度理事

徳山 美智子 (元大阪女子短期大学)

本学会の設立 20 年までの歴史を創設期、始動期、展開期、充実期と区分するならば、筆者は、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期理事会において理事を務めたので、展開期から充実期に向けてその活動に関わったことになる。「設立 20 周年記念誌」編纂を機に文字として列挙されるべき活動や事象は、他の現・元理事諸氏に委ねるとして、筆者にとって最も意義深く、記憶に残ることを二つ記す。

一つ目は、初めて理事になった第Ⅲ期、天野敦子理事長、後藤ひとみ編集委員長兼事務局長態勢の初年度に見つけたある箱のことである。筆者は当時、愛知女子短期大学（現 名古屋学芸大学短期大学部）に所属しており、学会事務局へ足を運ぶことが少なくなかった。或る日、学会専用の文書ロッカーを整理していた際、学会設立の経緯がづられた文書・文献と学会員から寄せられた熱い想いが込められた書簡、整然と仕分けられた郵便切手が入った箱を見つけた。この「宝物」に筆者は、30 余年の養護教諭勤務の道程で葛藤した事象の根源を解き明かすカギをかすかに見つけたように感じた。その思いが出発点となり、養護学の早期確立の重要性を確認し、以前にも増して人の絆を重視した本学会活動の意義を五感で感じ取ることができた。

二つ目は、関連学会と比較し遜色のないよう、『日本養護教諭教育学会組織基盤の盤石化』に向けて、ただひたすら邁進する後藤ひとみ事務局長の姿を直視したことである。この時期に費やされた莫大なエネルギーは、Ⅳ期、

V期に活動の形となり、VI期に引き継がれていることは明白である。

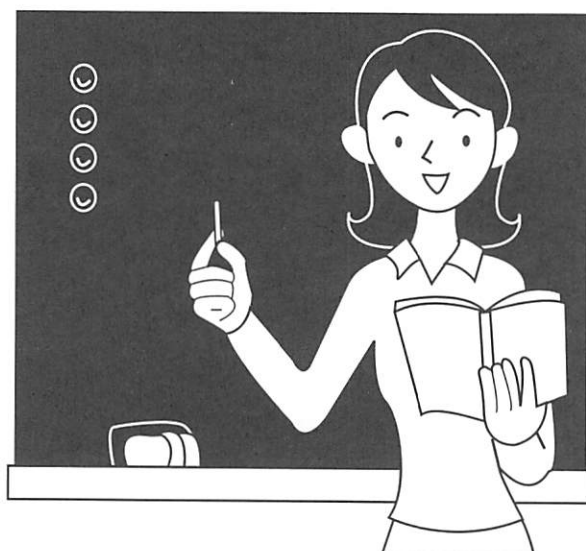
改めて学会設立の「原点」に立ち返りつつ各種委員会の活発化、学会内外に理解が得られる専門職種としての「養護教諭の職業倫理綱領（指針）」の確立、理事会並びに学会誌編集委員会議事録の公開による活動の可視化、全国養護教諭連絡協議会並びに日本養護教諭養成大学協議会等関連団体とのより強固な連携、体制整備と活動内容の充実を促進していただきたい。設立 20 周年を迎え充実・発展期を歩む今こそ、すべての学会員の叡智を集結し、諸事のタイミングをつかみ損なうことのないよう留意しつつ、より一層の飛躍・発展を願ってやまない。

## 理事を経験しての学びと今後の養護教諭の活躍の期待

2003～2011 年度理事

山崎 隆恵（神奈川県立綾瀬西高等学校）

第Ⅲ期の 2003～2005 年度から、三期 9 年にわたって理事をさせていただきました。最初の期で一番印象に残っているのは、「養護教諭」の英訳作業です。それは、理事になる以前の 2001～2002 年度に英訳WGに所属して「Yogo teacher」を導いたことが基礎にあります。アンケート集約作業中、会員内外の「養護教諭」という名称やその仕事内容に込められた養護教諭諸姉の思いを感じ、それらを的確に表現したいと考えWGや理事会で熱く論議しました。また、ハーモニー編集を担当し、各地の養護教諭と交流ができよい経験になりました。印刷業者とは、最初こそ顔を合わせて赤字を入れる校正を行いました。2 回目からはPDFファイルを使った校正に変更しました。おかげで、その後担当者が日本各地に移り変わった現在も取引が続いています。2006～2008 年度で印象深かったことは、中央教育審議会答申 スポーツ・青少年分科会「学校健康・安全部会」の審議経過報告に対する意見提出です。養護教諭は専門職としての自律性を意識しながら、学校教育法で定められた教育職員であることを常に主張し続けなければならないことを感じました。また、総務・庶務担当理事として、理事長や事務局などの協力を得ながら、理事選出方法を選挙制に変えたことは大きな成果と考えています。2009～2011 年度は、総務担当常任理事兼庶務を引き受けました。また編集委員としても三期とも携わり（現在も！）、超多忙な勤務校との兼ね合いに苦労しました。現在は総務と庶務を独立させる体制に変わり、今、振り返ってよくこなせたと思い、ひとえに理事会内外の方々のご協力のおかげと感謝申し上げます。このように学会の発展を考え協力してきましたが、今後のさらなる発展と養護教諭のますますの活躍を切望しています。





「養護教諭の倫理綱領」を養護教諭の魂をこめて教育し、実践し、研究する。

—二十歳代は学会・学会員の自律に期待する。社会に役立つ専門職の羅針盤を持って船出!!—

2006～2008 年度理事

鎌田 尚子 (桐生大学医療保健学部)

学会創立 20 周年記念誌におめでとうございます。公職の激務の中、学会運営を支えてこられた皆様の熱意と使命感に心より敬意を表します。今や、パブリックコメントを求められる学会になり、*Yogo teacher* の英語表記で他学会、外国とも交流ができるようになり、学会誌の充実も素晴らしい。しかし、混沌とした社会の問題解決に専門職として乗り出すのが 21 歳からの生き方であろう。さて、昨今のいじめ、虐待のニュースを見るたびに、子どもの人権が、子ども一人ひとりに、生きる権利、生命権、生存権、発育権、更に、これらが守られる権利、そのために「助けられる権利」「ヘルプミー」と言っていることが、教育されていないことに愕然とする。どうやって、子ども達が自分の本音をお助けマンに伝えるかの教育、必要性を一生懸命に考えている。71 年前「養護訓導」の原点である「養護」の魂が、ビジョン(理念)・ミッション(使命)・パッション(熱意)として、今こそ求められている。子どもたちの悲痛な叫びに、「養護」(原義)の専門職として応えないのは、けしからんと自分に怒りがこみ上げてくる。一日も早く、養護教諭養成の基盤となる「養護教諭の倫理綱領案」を日本養護教諭教育学会が承認して、全国の養成大学で教育できるようにならないか、日夜眠れぬ思いである。この専門職としての働きをするためには、後ろ盾となる「養護教諭の倫理綱領」、サポートする自律した学会と学会員の仲間が必要である。学会誌 Vol.16, No.1 pp23-36 に詳細がある。具体的な教育・指導方法は、実践の中で子どもと話し合っ創り明るい未来を目指したい。会員からの意見を受け付ける窓口を用意して戴きたい。

身も心も引き締まる学会で学んできて

2006～2008 年度・2012～2014 年度理事

斉藤 ふくみ (茨城大学教育学部)

1992 年秋に勤務していた高校に一枚の葉書が届きました。恩師の堀内久美子先生より全国養護教諭教育研究会入会案内と第 1 回研究大会のお知らせでした。私は大学院卒業後あまり研究らしい研究ができず、堀内先生、天野先生に顔向けできないような心持ちでいましたので、これを機会にがんばろうと思入会しました。そして第 1 回研究大会で発表したいと考え準備し発表しました。その後第 6 回大会まで欠席しました。理事を担当させていただいたのは 2006 年～2008 年で、ハーモニーを担当いたしました。年 3 回の発行は、発行した途端に次号の準備にとりかかるということで 3 年間はハーモニーのことが頭を離れませんでした。任期を終えてしばらくしたこの春、三木理事長よりお声をかけていただき、現在は編集委員会事務局を担当させていただいています。私は本学会でたくさんの方の事を学ばせていただき、おこがましい言葉を使わせていただきますと育てていただきました。とても感謝しております。会員も養護教諭の方が多数を占め、養護教諭のことを心から語り合える貴重な本学会に、身も心も引き締まる思いで今後とも関わっていきたく思います。

## 会計とハーモニーを担当して

2006～2011 年度理事

鈴木 薫 (就実大学)

理事を仰せつかった6年間で分かったことは、「人・物・金・時間・情報」の5項目が揃ったときにより仕事ができるということ。そして、とりわけ会計を担当して分かったことは、本学会は財政面でいかに収益性を高め、収支のバランスを考えた運用をしているか、会員への還元を考えているかということである。20周年記念行事の開催の声が上がったときも、学会誌2巻発行も、助成金研究の立ち上げもそう。5,000円の年間費の貴重な収入源を有効活用するために、年会費でこれだけの内容を維持していくために、整理できるところは整理して努力を重ねて財政管理を行っている。何年も年会費の金額を据え置き、しかも内容を充実させている学会は多くはないであろう。養護教諭の未来に向かってことを動かすとはこういうことかと実感している。

二期目はハーモニーを担当した。第一号から通してみると本学会の成長記録であることがよくわかる。全会員の目に触れるのは学会誌とハーモニー。8ページではあるが、新鮮な情報を発信しようとした歴代担当者の思いを繋ぎたかった。A判になり情報量も増え、執筆依頼では全国の皆さんにご無理をお願いしたが、どなたも気持ちよく引き受けて下さり養護教諭への思いを再確認した。印刷会社さんにも感謝である。

20周年記念行事は温故知新の機会であると思う。学会設立に奔走して下さり「人・物・情報」を繋ぎ、「財政」面でも基盤作りをしてくださった先輩たちの貯金を使わせていただきながら、会員全員で知恵を出し合い、子どもの幸せや養護教諭や学校の未来を考えていきたいと切に思う。理事を経験させていただいたことは、何よりの私の財産となった。

## 10年間の学会誌編集から見えてきたこと

2006～2014 年度理事

鈴木 裕子 (国士舘大学文学部)

1993年に入会し、2003年から編集委員、2006年からは理事として、ハーモニー編集担当も含め編集委員会に足掛け10年携わってきました。2009年からは学会誌編集担当常任理事となり2期目を迎えました。本来、経験豊富でご見識の高い方が学会誌編集委員長を担当されるべきところ、前委員長のご退任により未熟者が急きょお引き受けすることとなり、関係の皆様には、不手際、ご無礼がございましたことをこの場を借りて深くおわび申し上げます。

おかげさまで投稿論文は年々増加し、養護教諭の研究の深化と拡大を喜ばしく感じております。しかし今回から導入した「学術集会一般演題の領域区分」に照合すると、すべての領域からの投稿があるとは言えず、養護教諭教育に関する学問構築にあたり課題であると感じます。また投稿規程に沿わない投稿や、残念なことに掲載に至らない論文もみられます。今後は論文の種類や投稿規程、査読要領等の検討により本学会の目的に即した学会誌編集方針をより明確に示していくことで、一層充実した学会誌を発刊できるよう、そして養護教諭教育の発展に貢献できるようさらに努力してまいりたいと存じます。

今後ともご指導、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

## 学術担当理事として

2006～2014 年度理事

高橋 香代（岡山大学大学院教育学研究科）

日本養護教諭教育学会が設立 20 周年を迎えました。私は、1984 年度より岡山大学教育学部養護教育講座で養護教諭養成に携わってきましたから、今年で 30 年余になります。しかし最初は、養護教諭を養成するというより、基礎医学の担当教員という意識でしたから、本学会の設立当時は、存在すら知らないという状況でした。本学会の学術集会に初めて参加させていただいたのは、中桐先生が学会長として 1999 年に岡山市で開催された第 7 回の学術集会だったと思います。

その頃は、国立大学の教員養成課程の 5000 人削減や再編・統合を進める遠山プランが検討されはじめた時で、のんびり屋の私も、養護教諭養成について真面目に取り組まないといけないのではと考えるようになり、日本教育大学協会全国養護部門研究委員会に参加し、本学会に入会した次第です。

2006 年から第 IV 期理事会の理事として研究活動を担当させていただきましたが、当時は教育学部長であったため、多忙でご迷惑をおかけしました。2006 年の総会では、研究助成金対象研究の選定基準を承認していただき、2008 年には学会長として第 16 回学術集会を開催させていただきました。2009 年度には学術担当常任理事となり、2009 年度総会で投稿奨励研究制度を制定していただきました。研究助成金対象研究も投稿奨励研究も、理事会では、現職養護教諭の研究を推進していきたいと考えてきました。今後さらに、現職養護教諭の研究が充実・発展されるように願っています。

## 協働の中での学び～学会理事等の経験から～

2009～2014 年度理事

小林 央美（弘前大学教育学部）

2009 年度、学会設立 16 年目。それまでの総会での承認審議による理事の選出から発展し、選挙による理事選出をスタートさせました。初めての選挙で、選挙管理委員を努めさせて頂きました。吉田瑠美子選挙管理委員長と岡田加奈子・平川俊功の両選挙管理委員とともに、会員の選挙権・被選挙権を大切に公平な選挙となるように心がけ、助け合って活動したことを思い出します。

2009～2011 年度、学会理事として会計を担当しました。初めての理事で、会費の金庫番を仰せつかったのです。大所帯であり、全国各地で活動するそれぞれの担当者が執行する金庫の管理運営には随分と苦労しました。当時の後藤理事長はじめ、総務担当の山崎理事、事務局長の下村理事、前会計の鈴木薫理事等、たくさんの方のお知恵をお借りしながら何とか責任を果たすことが出来ました。この間、学会誌が年 2 回の発刊となり、研究の充実に予算が多く計上され、会計業務からも学会の発展を感じました。

また、2009 年度の第 17 回学術集会は弘前大学での開催でした。多くの方の参集を頂き、とてもうれしく思いました。弘前の実行委員の方々とも学会開催に向けた活動で苦労を共にし、絆が深まったと思います。関わらせて頂いた当時の学生もいい経験をし、学ばせて頂きました。

こうして振り返ると、学会での様々な活動は多くの方々との協働の中での学びの日々であったと思います。これからも、学会のますますの発展に向けて、非力ながらも尽力を尽くしたいと思います。

## 「学会設立 20 周年記念誌」 発刊によせて

2009～2011 年度理事

永田 智恵子 (静岡市立賤機中学校)

日本養護教諭教育学会が設立 20 年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

また、学会設立 20 周年記念集会に実行委員として参加させていただいたことに深く感謝申し上げます。

私にとって、理事をさせていただいた 2009 年からの 3 年間は、とても充実し、実り多いものでした。教育委員会や全国養護教諭連絡協議会での経験を生かしてほしいとのことで理事長からの推薦を受けましたが、第一回の理事会では、理事の皆様は圧倒され、この場に自分がいることが不思議な感覚だったことを思い出されます。

理事として、三木学会活動担当常任理事のもと「養護教諭の専門領域に関する用語の解説集」<第二版>の発行に携わることができたことをとても光栄に思います。2008 年 1 月の中央教育審議会答申や 2008 年 6 月の学校保健安全法公布など近年の動向を踏まえ、学会活動委員会に改訂ワーキングを立ち上げ、その一員として、改訂作業に取り組ませていただいたことは、私の養護教諭の経験の中で忘れられないこととなりました。

これまで何気なく見たり、読んだりしていたものが、理事の皆様方のご努力によりできたものであることを感謝すると共に、今後、一会員としてできる限り協力していきたいと思っております。

日本養護教諭教育学会の今後ますますの御発展を祈念申し上げ、設立 20 周年記念誌の発行に当たってのお祝いのご挨拶とさせていただきます。

## 学会 20 周年を迎えて

2009～2011 年度理事

吉田 あや子 (西南女学院大学)

学会員としての 18 年をふり返ると、様々な学会活動に参加させていただき諸先生方と共に学びあうことができたことを嬉しく思うとともに、会員の皆様に心から感謝申し上げます。例えば、学会名表記の英訳ワーキングメンバーとして検討したこと、学会発表やプレコングレスのスタッフとして関わったこと、さらに平成 21 年から 3 年間理事として担当したこと等が次々に頭に浮かんできます。とりわけ、「養護教諭の職業倫理に関する研究」については、当初 2 年間は一研究員として参加し、その後 3 年間は後藤理事長の下で学会活動担当理事として携わり、鎌田尚子先生方とともに多角的視点で原案作成に精力的に取り組みました。養護教諭を専門職とする者にとって、特に学会にとっては重要なテーマであり慎重さが求められますが、三木理事長の下で早急に検討が進められることを願っております。加えて、専門職としての養護学の構築や養成に関する課題の検討も急がれるところかと考えます。

さて、私は養護教諭を 20 年弱経験し、大学で養護教諭養成に 17 年ほど携わりました。その間、本学会における講演やワークショップなどに積極的に参加し、その学びの成果を学生指導に生かすことができ感謝しております。この経験から、養成担当者や現職養護教諭だけでなく未来の養護教諭である学生の皆様にも積極的な参加を促し、本学会が益々発展していくことを心から願っております。

## 学び続ける養護教諭であるためにー日本養護教諭教育学会での学びー

2012～2014 年度理事

安藤 徹子 (坂戸市立坂戸中学校)

学会の成人期第一歩となる第VI期より、総務(庶務)担当理事を務めてさせていただいております。各先輩理事の方々が築き上げてこられた本学会をさらに充実、発展させていけるよう精いっぱい努力してまいります。

さて、私が本学会に入会したのは6年前です。現職の養護教諭である私の「学会」に対するイメージは、大学の先生方の研究発表の場であり、とても敷居の高い場所であるという認識でした。しかし、県の長期派遣研修制度を活用し、大学へ研修に出た際に、様々な学会に参加する機会がありました。その中で学会は、養護教諭の実践を評価することのできる学びの場であることを知りました。特に、本学会は「養護教諭教育」が冠となった学会です。養護教諭は、ほとんどが一人職であるため、なかなか校内で自分の実践を評価してもらう機会がありません。常に学び続ける養護教諭として、学会の存在は大変重要であると思います。私自身、本学会での一般口演やシンポジウムでの演者の経験は自己を省察する良い機会となりました。

今後も、より多くの理論と実践をつなぐ研究を積み上げていくことで、養護教諭の実践の広がりや深まりが期待できると考えます。学会のさらなる発展のため、現職の理事である私の使命は、養護教諭の先生方に学びの場である学会の存在を理解してもらう活動です。今後も努力してまいります。

## 祝 20 周年 そして、これからも

2012～2014 年度理事

池田 みすゞ (長野県北佐久農業高等学校)

日本養護教諭教育学会設立20周年おめでとうございます。多くの先生方の熱意と努力によってここまで成長してきたことを養護教諭のひとりとしてうれしく思います。

私は、1998年に入会しました。転勤した年で、自分の仕事を見つめ直したかった事と、保健師学校で免許をとったため、保健師学校における養護教諭の専門科目が少ないことが気になっており、この学会で学びたいと思い入会しました。

2001年、公募で共同研究の募集があり、私は怖いもの知らずで応募しました。この共同研究では本当に多くの事を学びました。未熟な私を見捨てることなく一緒にやってくくださった仲間の先生方。多くの大学の先生との出会い。話し合いや雑談でさえ、日頃の保健指導の気づきに結びつき、自分の仕事に対する意識が変わりました。また、自分の未熟さも明確になりました。共同研究を通して、日頃の活動を研究の視点で見ることの大切さを学びました。

2012年、力不足ながら、会計担当の理事を務めることになりました。学会誌の年2回発行、養護教諭の専門領域に関する用語の解説集の発行等、本学会の内容の充実とともに、会費の運営も重要になってきています。養護教諭を取り巻く情勢にアンテナを高く持ち、養成機関、教育現場が一丸となって、養護教諭のため、学校教育のため、本学会が発展していくことを願っています。

## 日本養護教諭教育学会がつけた火

2012～2014 年度理事

今野 洋子 (北翔大学人間福祉学部)

日本養護教諭教育学会のすばらしさは、ひとの心に火をつけることにある。

本学会との出会いは、1998年の茨城大学で開催された第6回学術集会であった。

1998年3月に養護教諭の職を退き、4月より養成教育に携わる身となった自分にとって、「養護教諭」を冠する学会との出会いは新鮮であり刺激的であった。このときのメインテーマが小倉学氏の退官時のメッセージからとられたものであること、シンポジウムでも小倉学氏の養護教諭養成教育について深く知る機会となり、養護教諭養成教育を担う教員としてどうすればいいか道を示された気がした。また、養護教諭を養成する教員としてがんばるという決意を新たにし、意欲に燃えたものである。

第13回の女子栄養大学で開催された学術集会以降は、毎年学生を引率しての参加となった。参加した学生が後輩に、学術集会での充実した学びを伝えることで、学生たちの参加希望者が増えていった。第15回は、本学の北方圏学術センターで開催され、このときから学生も会員登録をし、自分の研究を発表することになった。この発表についても、先輩学生の発表の様子を見て、「自分も来年発表したい!」と学生が奮起することで、可能になったことである。

今年度から本学会の理事となり、会員のみなさまのために尽くしたいという思いが高まっている。灯された火を絶やすことなく、ますます美しく燃え立たせたいと思う。

## 学会に育てられた想い

2012～2014 年度理事

入駒 一美 (岩手県教育委員会)

学会の設立20周年と聞き、まさに自分を育ててくれた学会であると改めて思う。

新採用の無我夢中の時を過ぎ、自分のスタイルを確立してきた頃、自分の力量不足を日本学校保健学会で痛感した。と同時に、自分の職である「養護教諭」を、どうして他職種の研究者に委ね、自ら問う研究が少ないのかを悶々とした「想い」でいた時に、この学会が設立されたと記憶している。すぐに入会し、今思うと赤面の研究ではあったものの、研究することの楽しさ・意味を教えてくれたと感じている。

その後、養護教諭という職に行き詰まり、一度退会をした。数年間のブランクの後、やはり自分たちの手で切り拓いていかなければならないのだと思い立ち、再度入会したところ、会員番号の多いことに驚いたとともに、全国の志を同じにする方の多さに勇気づけられた。学術集会にも久々に参加したところ、たくさんの素晴らしい内容に圧倒され、またしても勉強不足を反省した。それが、日々の仕事のエネルギー源にもなり、仲間と共に楽しい学びを続けてきている。

今、3.11の東日本大震災津波の被災県の行政に関わる者として理事を仰せつかり、皆さまから寄せられたご厚意を糧に、養護教諭一人ひとりが、明日に向かって踏み出せるよう、この学会をとおした養護教諭の資質向上と力量形成の研究に少しでも貢献していきたいと思っている。

## 学会設立 20 周年を記念して—これからの 20 年をめざして—

2012～2014 年度理事

北口 和美 (大阪教育大学)

学会設立 20 周年を迎え、先輩方々のご努力とご尽力に対し心より感謝を申し上げます。

将来を担う子ども達の健全な成長・発達をひたすら願い、養護教諭教育の充実と発展に寄与しようとする学会の 20 年のあゆみを振り返るとともに、学会のこれからのバトンタッチされる一人として、その役割を重く受け止めております。毎年の学術集会では、その時代を生きてきた人々、その時代の求めに如何に応えるべきかを考え企画されております。また、20 周年記念の展示からは、資料を集め、受け継がれてきた精神を次の時代へ引き継ぐという真摯な態度の継承として感じる事ができました。

そして、これからの 20 年に向けて学会はいかにあるべきかを同時に問われているように思います。学会に託される課題は多くありますが、子ども達の心身の健康を保持増進し、教育の効果に資するという職の確かさを確立すること、養成のバックグラウンドは異なるものの養護教諭の力量形成、資質向上を図るということは共通した課題です。さらに、養護教諭教育学会と冠していますが、子ども達の健康問題を解決するためには、様々な人々との連携なしには解決できない時代である今、学会では養護教諭に限らず、同じ課題や興味を持った多くの人が、新しい知見、実践経験、研究を自由に発表・討論できる魅力的な場になるようにしていくこと、ひいてはそれが学会の社会的存在意義を確かなものにしていくのではないのでしょうか。学会発展のため微力ながら尽くして参りたいと思います。

## ハーモニーを担当して

2012～2014 年度理事

古賀 由紀子 (九州看護福祉大学)

今期、ハーモニー担当理事となりました。歴代のハーモニー担当者から担当者へ少しずつ冊子を増しながら受け継がれてきたハーモニーの創刊号から最新の 59 号までのファイルが私の手元にあります。折しも学会設立 20 周年という記念すべき時にこのような役を仰せつかったことに感謝しています。

「ハーモニー」はその前身である「全国養護教諭教育研究会通信」第 1 号が、1992 年 12 月 25 日に発行されています。通信として産声を上げた当時のページ数は 1 頁。その後名称が「ハーモニー」となり、何度か表紙デザインが変わり、サイズも B5 から A4 へ変更され情報量も増えるなどの変遷があります。先輩担当者の方々の思いや学会の思いがたくさん詰まって受け継がれた 1 号から 59 号が重く、担当者としての私の手元にあることを幸せに感じています。

ところで、第 1 号発行時の会員数 38 名、第 2 号には「会員が 54 名になりました」、第 3 号には「会員が 99 名になりました」、とあります。私の会員番号は 83 番。いつ会員になったのかも覚えていなかったのですが、手元にあるファイルしたハーモニーを見て知ることができました。また、過去の学会に関する事等調べてほしいとの依頼も時々あります。資料としての価値があることも改めて感じています。これから月日を重ね会員もさらに増え、そしてハーモニーも号数を重ねてゆきます。先輩担当者の方々がやってこられたように、私も思いを込めてハーモニーを作る作業をし、また次の担当者に受け継いでいかなければなりません。